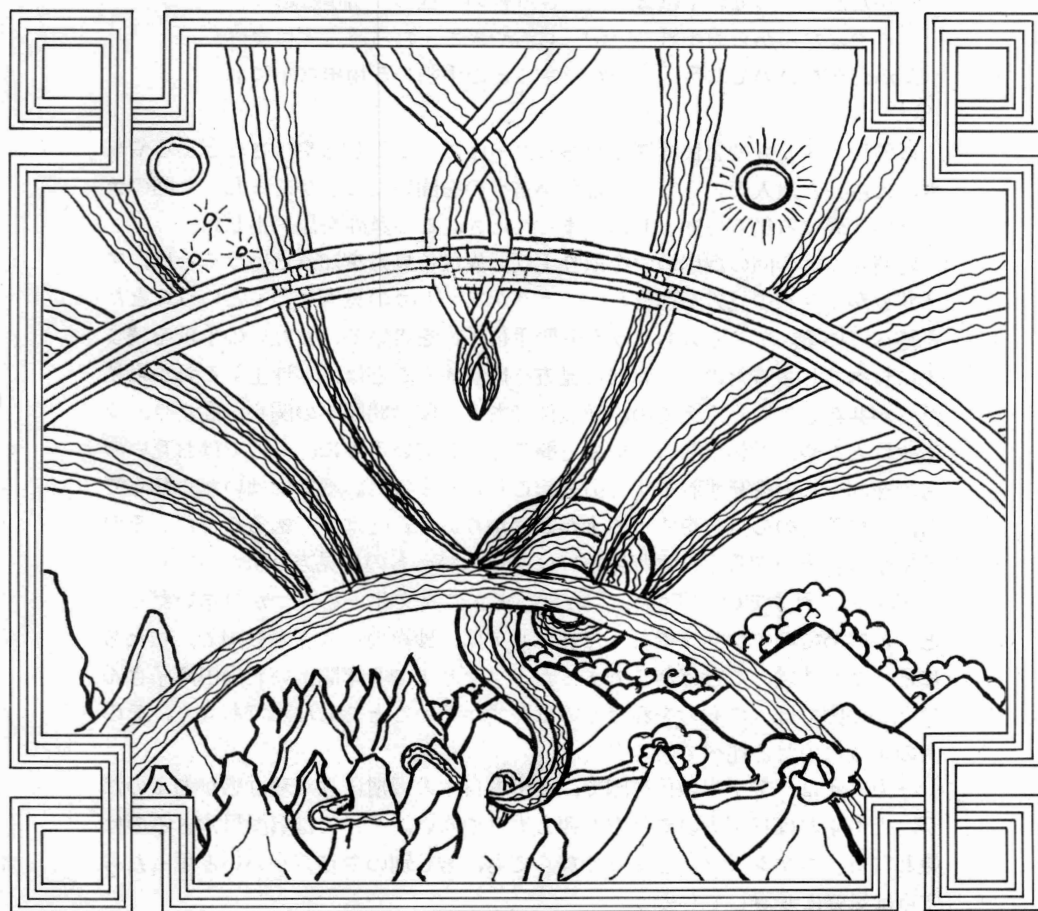


# Trial & Error トライアル・アンド・エラー No.106

試 行 錯 誤



広大な宇宙と神々の住む山々

## 特集 異なる見方を知る

|                       |    |
|-----------------------|----|
| 異なる見方を知る .....        | 3  |
| 「南」から「南」へのメッセージ ..... | 5  |
| タイに暮らして .....         | 6  |
| 私が見た日本 .....          | 8  |
| 異文化に学ぶ .....          | 10 |
| 1991 JVCいろはかるた .....  | 12 |
| 速報 JVCソマリア撤退 .....    | 14 |
| 〔投稿〕カブール側からの援助へ ..... | 16 |

## 地球上で共存するために

しろやぎさんとくろやぎさんの童謡をご存じだろうか。

「しろやぎさんからお手紙ついた くろやぎさんたら読まずに食べた

しかたがないのでお手紙書いた さっきの手紙のご用事なあに

くろやぎさんからお手紙ついた しろやぎさんたら読まずに食べた

しかたがないのでお手紙書いた さっきの手紙のご用事なあに」

以前にアメリカで公民権運動が盛んだった頃、このしろやぎさんとくろやぎさんは白人と黒人のようだ、と誰かが言うのを聞いたことがあった。今回のテーマが「異なる見方を知る」に決まったとき、この童謡を思い出した。

岩崎さんは今回の湾岸戦争を取り上げ、異なる見方を知るということは、アメリカがイラクの見方を理解し、イラクがアメリカの見方を知ることだと述べている。アメリカもイラクも勝手に手紙を書いて、お互いの手紙を読まずに食べてしまったのだ。異なる見方を理解することは、地球上でこれから私たちが共存していくうえでの必須条件である。環境問題への関心が高まり、森にすむ人々や、動物たちの言葉まで聞こうとしているのに、一方ではお互いの言葉を聞くことをせず戦争まで引き起こしてしまった。戦争にはいたらなくても、異なるものの見方をする同士がぶつかりあうことはよくあることだ。その時相手の見方を知ろうとすれば争いは避けられ、ものの見方も広がる。

JVCのこれまでの11年間の活動も、まさに異文化とのぶつかりあいだった。とくに初めてのアフリカであったソマリアは、砂漠のイスラム教国で、私たちにとって初体験のことばかりであった。ソマリアで2年間働いた磯田厚子さんは、この国では人にものをねだるのは恥ずかしいことでもなんでもなく、その人の才覚なのだと述べている。

一方タイは、アジアの仏教国で、食事でも日本の習慣に近く親近感があるのだが、ともすれば日本人のやり方を押しつけやすい。タイでは真面目すぎるのは嫌われる。スケジュールどおりでなくても、もし別のやり方がいいと思ったら彼らは気軽に変更してしまう。

私たちは活動を通してお互いに違いのあることがわかり、それを認めあってこそ本当に仲良くなれることを知った。異なる見方を知ることは新しい体験をすることであり、むしろ、異なる見方を知ることこそ活動の第一歩といえるようになったのである。

なお、今回の特集では言葉足らずのこともあり、また3月に続編を考えている。

### <表紙>

チベットのThangka paintingはいわば宗教画ですが、チベット仏教の宇宙観をも表しています。足かけ6年、インドのカルカッタとニューデリーに滞在している間に、ほんの少し修業する機会に恵まれました。そのThangkaの様々なモチーフをアレンジして、平和や愛、自然などをシンボリックに表現してみたいと思っています。

(菊池みよこ)

## 異なる見方を知る

岩崎 駿介

### 湾岸戦争は南北戦争

ペルシャ湾で戦争が始まった。戦争とは、われわれJVCがいつも連帯を心にかけている「第三世界の人々」と「地球環境」にとって、最も大きな脅威である。JVCの活動地の一つエチオピアでは内戦が激化し、マーシャ村での植林、動きだした農業学校など全ての活動を中止しなければならなくなった。積み上げたものが崩れ、人々はさらに死に近づく。

湾岸戦争は、南北戦争であると思う。近代の戦争は、そのほとんどが南の利権を維持、獲得しようとする北の国同士の争いの結果として生じた戦争であったが、湾岸戦争ははじめての南北戦争であると思う。

アメリカは、イラクがクウェートを侵略したことは「国家主権」に対する侵犯であり、これを撃退することは正義の闘いであるという。国家主権の集まりである国連は、こぞってこれに賛成する。

一方のイラクは、クウェートはイラクの一部なのだと主張するが、現代の国家という単位を通して地域の主権が認められている国際システムにあっては、もう一つ説得力がない。しかし、イラクは多分、都市と農村という関係からみるとイラクの一部とクウェートとは同一なのではないかと思ふ。また、この戦争はアラブの闘いなのだという。アラブの世界、アラブの統一というものがどのような広がりを持ち、具体的に何を意味しているのかを正確に理解することができないけれど、アラブ諸国が今度のイラクの出兵に対して複雑な様相を呈しているのをみても、アラブという世界は他の地域ではみることができない独特の結束を示している。そして、そのもっとも象徴的な事象がイスラエル/パレスチナ問題である。

2000年の昔に、かつて住んでいた事があるからといって、その地に戻る権利があるのかどうか。アラブの世界は、この点において北の強権を強く感じているのではないか。北の国々が力で南を押さえ込むことは、いずれにしても人間と地球にとって脅威で

ある。

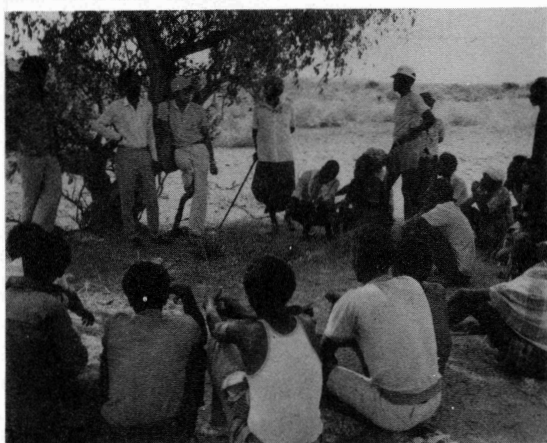
私はイラクにそれほど肩を持つものではない。しかし、このような力の対決の過程で、いちばん割を食うのは、やはり力弱き第三世界である。日本政府はこの機に乗じて、難民ではない難民といわれる人々をどこからどこに運ぶのかは定かでないままに、自衛隊機を出そうか出すまいかを考えている。なにか、火事場に乗じてチョコチョコと他の先進国に顔向けし、その上ドサクサに紛れて自衛隊海外派遣の既成事実を作りあげようという姑息な手段と議論には、なかなかついていくのが難しい。

### 異なる見方を知ることが共存への道

ところで、今月のT/Eは、「異なる見方を知る」という特集である。それは、まさにアメリカがイラクの見方を理解し、イラクがアメリカの見方を知ることにはかならない。

私自身の、第三世界とのつきあいの中で、何が豊かかといえば、自分とは異なる第三世界の人々の見方を知ることができることである。たとえば、これは中国からの留学生に聞いたのであるが、中国では「川」というとき三つあるという。非常に大きな海のような「江」、中ぐらいの「河」、そして小さな流れである「川」という具合に、同じ名称であってもその言葉によって生じるイメージが異なるのである。日本では肉といえば動物の肉体のどの部分をも意味することになるが、アラブの世界では、肩の肉、ももの肉という具合にすべて別な名称が与えられているという。この逆に、日本では雨にもいろいろあって、時雨（しぐれ）、夕立（ゆうだち）、春雨（はるさめ）など機微に応じて、雨も多様な表情をもっている。

このように、ある対象に対して自分の見方に固執するのではなく、同時に他の見方を重複的に理解することができる能力、すなわち複眼性こそ、現代社会においてもっとも要求されている能力である。異なる見方を理解することは、異なる世界が今後この地球上で「共存」するための必須の条件である。



この意味において、これまで何度か指摘してきたことであるが、JVCのメンバー柴田久史君がソマリアの現場でソマリア人に買い物を頼み、帰ってきたのが夕方であったので「何をやっていたのだ」と怒鳴ったところ、町に出たらあれこれの人に会い、その人の用事なども手伝ってあげて遅くなったのだという返事を聞き、確かにそれぞれの目的のために行きと時間をブツブツきって生活するのは近代人の特徴であって、決して歴史的に普遍的な生き方ではなかったのだと学んだことや、同じく柴田君が初めてソマリアに行ったとき、この国は文化的遺跡もなければ、「もの」として残る歴史的に継承すべきものが何もないのだと思ったけれど、しばらく生活するうちに彼らの文化は言葉の中に隠されていたことに気づいたこと、また飼っている羊に一匹一匹名前をつけるように、まず名前を付けることによって認知・認識が始まるのだということが分かったことなど、柴田君が異国の地でふれる「異なる見方」によって、ものを理解するについての相対的な幅を広げていくのを知ることは実に印象的であった。

この意味で、われわれはもっと想像力を豊かにしなければならないと思う。他人が置かれている状況、他人が発する表情と言葉から、他人の見方を知り、自分の見方と重ね比較し、共存の方法を探らねばならない。

#### 他人の見方は訓練によって見えるようになる

ここでちょっと宗教じみた話になるが、「ものを理解する」、あるいは「ものを見る」ということはどういうことなのかについて、私が昔から考えてきたことを紹介したい。

私は、ものを見るとは、自分からある種の目に見

えない光を発散し、その光が対象物にぶつかって跳ね返されてくるのを自覚するがゆえに、そのものを見ることができるのだと考えてきた。決して、たとえば山や木やあるいは他の生きものなどの対象物がある種の光を発散して、その光がわれわれを射るのではなく、あくまでこちら側の光の発散によって、その対象物を見ることができるのである。このものを見るという過程で、二つの原理が働いている。

一つは、自分で光を発散する以外見ることができない、すなわち自分の主体的努力なしには、見ることもできなければ理解することもできないということ。二つは、人を含むすべての動物は、すべて原則として自分の発した光を見ることはできるが、他人の光を見ることができないということである。

この原則にたって、「他人の見方を知る」ということを考えてみると、他人の見方を知るとは他人の発散した光を傍受することができるということである。目に見えない他人独特の電波を、本来その電波を受信する機能が備わっていないにもかかわらず、受信してしまう能力が他人の見方を知ることができる能力である。

この能力は、訓練によって相当発達するものであると思う。冷静に想像力を働かせることによって、対象に対する見方の幅を広げて自己の相対性を自覚し、相手との「非共存」である戦争を回避することができないだろうか。

「同じ地平に立つ」とは、他人と同じ視点を獲得するということである。こちら側の尺度で相手を推しはかるのではなく、もう一本のものさしを取りだして測ってみることに、あるいは抱えきれないほど沢山のものさしを持ち歩いて、機に応じて他人の見方を的確に把握し、共存の世界を広げていきたい。

現代の戦争は、戦火を交える戦いのみを意味するのではなく、戦火を交えない日々の戦い、すなわち先進国の圧迫によって生きる術を失いながら、なお生き延びようと努力するカンボジアやエチオピアの人々の戦いも戦争といわねばならない。武器による死への圧迫か、目に見えない構造的な圧迫なのかの違いこそあれ、弱者が押さえ込まれるという点で共通している。

JVCは、これまで第三世界の目に見えにくい戦いに参加してきたのであるが、この度の目に見える湾岸戦争に対しても何ができるかを真剣に考えていかねばならない。



# 「南」から「南」へのメッセージ

本橋 栄

## 「南」で働く「南」の人々

「私は将来、第三世界で働くのが夢なんです」友人のタイ語の言葉を聞き一瞬耳を疑った。彼はあるタイの団体の中堅スタッフで、日本にも何度か来ている。仕事の関係でタイのバンコクも農村も日本の東京も田舎も知っている彼の言葉である。

タイはすでにNIESであり、開発途上国ではない、という自負のようなものが感じられた。

カンボジアで働いている私は、カンボジア人の研修のためにタイのNGOの現場の人々の力を借りたいと思って彼に会ったのだった。

地理的にも文化的にも近く、風土や農村の生活、人々の価値観にも、非常に共通するところの多いタイは願ってもない研修の場を提供し得ると思えた。国境を接する隣国カンボジアの人材開発に彼が理解を示し、協力を約束してくれたことはとてもありがたかった。

とはいえ、彼自身が国外へ出て働きたいとは思ってもしなかった。まだまだタイ国内であなたは必要とされているのでは？ と言いかけてやめた。彼なら、例えばカンボジアにすれば人材として日本人の私などよりはるかに役に立つかもしれない。

すでに、ある北欧のNGOがカンボジアの事務所と地域開発のスタッフにタイ人を雇った。カンボジア語をうまく話し、現地には良く適応しているように見えたが、本部雇いの外国人スタッフとタイ人スタッフの待遇に差があることを理由に一人はやめてしまった。

「南」の国と「南」の国の人々同士の協力は有効性が高いといわれて久しい。すでに国連機関や欧米のNGOでは多くのインド人やフィリピン人が働いている。だが、国連や欧米先進国の枠組みの中に人材として「南」の人を取り込むだけでなく、「南」の人々が自国での現場での活動の経験を主体的に交流することにこそ意味があるのではないかと思う。

タイのNGOの多くがまだまだその活動資金を日本を含む欧米先進国に頼っている現状では、例えばタイのNGOが独自にカンボジアでプロジェクトを持つということは現実的でないが、NGOのネットワークとして協力関係を作することは充分可能だ。



## インドでの研修

私は11月にインドに医療スタッフを3週間の研修に連れていった。インドで私たちを受け入れてくれたACHAN (Asian Community Health Action Network) というインドのNGOは、地域医療保健活動の人材育成のためにバングラデシュ、スリランカ、タイ、ホンコン、インドネシア、フィリピン、中国、韓国、日本のアジア保健研修財団などと協力関係をもって、あちこちでトレーニングコースを開いている。

今回の研修のねらいは、住民参加による地域に根ざした保健医療活動の実際をカンボジア人に見てもらうことにあった。そこで強調されたことは、第1に病院・医者中心の医療でなく、ヘルスワーカーを育成して村の人々が自分たちで健康を守れるようにすること。第2に貧しい人々が昔から生活の知恵として使ってきた薬草や伝統的治療方法には科学的に裏付けられるものが多く、村で起こる疾病の8割は直せる。多国籍企業が売り込む、西洋の高価で副作用のある薬品に頼るのでなく、地元の人々から学び、彼らに自信を与える必要がある、という内容だった。

人々の生活に即し、自然の摂理に根差した東洋の伝統に誇りを持つべきだという、「南」から「南」へのメッセージがそこにはあった。「南」と「南」の人々があちこち協力関係を築いていけば、私たち日本人の出る幕は少なくなっていくが、出会いの場を設定し、ネットワークの橋渡しをするというかたちで私たちにできることがあると考えている。

## タイに暮らして

大石道子

大学で異文化間コミュニケーションというものを学んでいたの、異なる見方には何よりも興味があつた。地球上の人と人との距離が、交通の発達や、情報量の伸びによってどんどん縮まっている現在、島国日本に住む日本人にとって、異文化に触れる機会は一昔前に比べ大変増えている。以前は敵だったり、聞いたこともなかった人々を友とを感じる機会も増えた。その中でも特に困難な状況にある友の地に、自らを置いて、今の自分が持てるだけの感性を働かせ、その友やその社会が必要とするものを感じ取って協力するような仕事をしたいと思ってから2年半になる。

「タイ人ってどこが日本人と違う？」日本に帰って来るとそんなことをよく聞かれる。今、改めて考えてみると、初めの頃はタイ人とはこういう人か、と日本人との違いが新しい発見だったが、時がたつにつれだんだん解らなくなってきた。反対に、日本人の特徴のようなものが、タイ人の目から見えてきたりする。少しタイ的になってきた日本人の私が、タイ人と日本人の異なる見方について考えてみる。

### いっしょに食べよう

オフィスでのことだ。10時になってもまだ誰も来ない、と、独りでいららし始めるころ、“オーイ、ロティット マーク”(渋滞がひどかった)といいながら、バナナのあげたのを持ってニコニコしながらやってくる。“キンドゥアイ”(一緒に食べよう)といって、コーヒーも入れてくれ、いつのまにかこちらがどうもありがとう、ということになって、遅れてきたことなどあっさりとごまかされてしまう。

お昼時、12時ちょうどにお腹がすいてくるのだが、誰も立とうとしない。“キンアライディー”(何食べる?)と聞くと、“買いに行ってくれるの?”と、みんなの注文をとってまわることになる。人間関係が実にスムーズで、人をのせたり人を使うのもうまい。ピー(年上の人)、ノン(年下の人)の関係が

はっきりしていて、ピーはノンの面倒をよくみるかわり、ノンは従うものと決まっているようだ。

タイ人と働いていると、タイ人は、日本人よりもう少し個人個人が独立していると感じさせられる。仕事には自分に任せられた領分があり、世話好きの日本人が、ちょっと手伝ってあげよう、というような軽い気持ちで手を出すと、自分は信頼されていないのかと感じたり、まるで子供のように扱われたと思うようだ。また、ちょっと手伝うつもりが、1度すると次からも自分の仕事となってしまう。

### 街角で

バスに乗っていると必ずといっていいほど、渋滞に巻き込まれる。5分、10分と時がたつにつれて段々いらいらしてくるのだが、周りを見渡すと、皆、平然と顔色一つ変えずに座っている。また。満員バスが猛スピードで走る時には、なんとか振り落とされないように必死で手すりに捕まるのだが、どうもうまくバランスがとれない。周りを見渡すと、日本のようにすり革にぶら下がるというのではなく、全身の力を込めて握っている。それに、乗り込むときの動きやお金を払う時の手の動かし方がとてもスムーズで、全体の調和がとれている。なんとなくぎくしゃくした人が乗って来ると外国人だとすぐ解る。

サムロの運転手に、ここへ行きたいといって地図を見せる。すると、たいてい3、4回紙をまわして、色々な角度からながめているのだが、どうも地図が読めないらしい。これはかなり多くのタイ人に言えることで、自分が歩いていく道筋は描いて説明できるが、人が描いた地図はどう見たら良いのかわからないらしい。同じように、人に道をきくと、たいていは親切に教えてくれるが、間違っていることが多い。解らなくても、解っているように教えてくれるのでかえって困ってしまう。道をきくときは、そのあたりをよく動いていそうなサムロの運転手にきくのがよいようだ。

## マイペンライとサヌーク

タイ人の特徴を表す言葉としてよくあげられるのに、マイペンライ（だいじょうぶ）とサヌーク（楽しい）がある。マイペンライの方は、すみません、どうもありがとう、に対する返事として相手に心の負担をかけない様にするために、一日に何十回となく使われる。時には自分の失敗に対してもマンペンライと自己弁護のように使われることもあり、おやおやと思われる。この言葉は、同じ様に気を使う民族である日本人にとって気分の軽くなる薬の様な作用を示し、使い方も、その意味も、理解しやすい言葉である。

もうひとつのサヌークという言葉の方は、日本人にとって、理解し、その“楽しい”状態を体験するのは、実はとてもむずかしいことのようにである。一般的にタイ人は、人生を楽しむ心の余裕があること、こちらがだめならあっちと物事を柔軟に考えられること、楽しみながら人とともに時を過ごすことをなによりも大切に考えていると思う。一方日本人は、勤勉、能率的な仕事の仕方、自己犠牲といったことを尊いとし、サヌークを追いかけることには少なからず罪悪感すら感じる。

違った気候風土の中で長年かけて育ってきた価値観だから人間にとって、どちらもプラスのものであることに違いない。しかし、この両極端の価値観の違いは、一方で、「日本人はまじめ過ぎて、融通がきかない」と言い、一方で「タイ人は楽しんでばか

りであり仕事をしない」と言うことになる。仕事の面から言うと、日本人の勤勉さは多くのことが短時間にできるようでいいが、それはとかく人の心持ちを無視して独走するきらいがある。

国際協力に関わる以上、人とのコミュニケーションを重きにおくサヌークは、大変大切なものとおもう。しかし日本人のような感覚では、国際協力においても、相手のことを思っている善意からにしても、タイ人には一方的な、おしつけに感じられることが少なくない。一般に日本人のこの特徴は、世界のなかでも主流をしめていないと思う。日本人は心して、相手の文化を尊重しながら、我々の価値観を少しずつ変えるだけの心の余裕と柔軟性を持ちたいものだ。

異なる社会に身を置くということは、単に異なる見方を知るに留まらず、自分がその社会から影響を受けて、変えられて行くことにもなる。そうやって学び合い、影響し合って、より、普遍的な価値観の創造をする。そんな使命も国際協力にはあると思う。

最後にコメンさんの一言。「竹の村、熊の沢、岡（丘）のある村、井戸の元（本）、池の島、蘭（い草）の田圃、大きな石…（タイにいる、日本人スタッフの名字）みんな、自然から生まれた名前なのに日本人はどうして、自然を破壊するのだろうか」

なるほど、タイ人、外国人の名字は、必ずしも自然に関係がない。

2年半の間に、様々な異なる見方を教えてくれたタイ人に感謝している。



チャイヤブーンで行われたJVCタイの総会  
（後列右から三人目が筆者）

## 私が見た日本

最近、特に思うことは、月日の流れるのは早いということである。私が日本に来てもう10年になる。この10年間に多くの人とめぐり会い、たくさんの思い出をつくることができた。

ちょうど10年前の今ごろ、日本に来て3カ月目ぐらいだった私は、胸に溢れるほどの好奇心を抱いていた。見るもの、聞くものすべてのことがおもしろく、驚くことばかりであった。ここでは、カンボジア人の角度から見た日本や日本人について、2～3感じたことを書いてみたい。

### 初めて触れた国

#### 地震に驚く

日本に来たその日のできごとであった。やっと日本の土を踏んだその晩のこと、なんと震度4ぐらいの地震に襲われた。大和定住センターの建物がどれだけ揺れたかわからない。カンボジアには地震がなく、日本に来る前に、「日本は地震がある、地震の時に火山が爆発して多くの人が死ぬ」と聞いていたもので、「もうだめ、死んでしまふよ!」「これからだというのに、よりによって何もこんなに早く地震が来ることはないのに」と思った。

しばらくすると建物の揺れはおさまったが、私はそうは感じなかった。というのは、私の体の揺れが止まっていなかったからだ。しかし、まだ生きているのはたしかだった。後で知ることになったが、ちょっとした地震ぐらいで人はそう簡単に死なないのがわかった。これが初めての体験だったが、それにしても恐しかった。

#### 着物の女性はどこ？

私は、日本に来る前に、きれいな日本人が着物を着てカレンダーの中で笑っているのをよく見たことがあった。とてもきれいであこがれていた。そして日本人は毎日着物を着て生活するとばかり思っていた。ところがどうだろう。きれいな着物を雑誌やカレンダーなどの写真ではなく実際に見てみたいという、よくありがちな少女のあこがれも、すぐに消え

### 駿河台大学学生 チュウ ダラレ

た。最初に成田空港に着いたのが夜だったので、きっと夜だから日本人はみんな寝ていて、明日になればきっと見られると思った。ところが、次の日も次の日も着物を着ている日本の女性はほとんどいなかった。カンボジアでは、どこに行っても必ず民族衣装の女性がいます。だから私も日本もそうだとばかり思っていたのだ。

#### 女性をほめるなんて！

次にびっくりしたことは、私のことを「きれいね」「かわいいね」と、私をほめてくれたことだ。その人が女性だったらいいのだが、男性にそういわれると考えてしまう。なぜなら、カンボジアではどんなに思っている、女性に対して「きれい」とか「かわいい」とか気安く口に出してはいけない。そういうことをいうのは、その女性を軽い女性と見ていることでとても失礼なことなのだ。いくらほめても、喜んでくれるどころか「へんなやつ」と思われて、「バカヤロー」とか「死んでしまえ」とか、あるいは運悪く怖い人に当たると、その人が持っている物や近くにある物がとんでくるに違いない。

#### 困った体育の時間

もう一つ私が困ったことは、日本の小学校に入った時だった。体育の時間の前になると、まわりのクラスメートが「次は体育だ!」とうきうきしている。そしてチャイムが鳴ったとたん、男の子、女の子がまわす服を脱ぎだす。男女がいっしょに着替えをしているのだ。

カンボジアでは、結婚して子どもがいる女性とはなく、まだ独身で、あるいはものごとがわかるようになる年ごろの女の子は、家族はもちろん、他人に肌を見せてはならない習慣になっている。半端な年で日本に着てしまった私ではあるが、カンボジアの習慣がほとんど身につけてしまっていた。たとえばまわりの男の子がまだ小学生とはいえ、短パンをはいて太ももを出し、しかも同じ部屋で着替えるなんてとんでもなかった。このようなところをカンボジ



ア人に見られたら、それこそお嫁に行けなくなってしまう。カンボジアの女性は必要以上に肌を見せない。また、日本人のように家族や修学旅行などで大ぜいの人といっしょにお風呂に入る、いわゆる裸のおつきあいの習慣もない。

### 日本語は難しい

次に、私が日本語を覚えはじめた時のおもしろかったことを書いてみたい。日本に着いた日、空港から大和に行く途中、あちらこちらに看板の文字が見えた。私は、自分がこれから勉強するものだと思ったとたん、急に体が熱くなって、ちらちらと星が輝いているように見えた。日本で暮らすことになるのだから日本語ができないととても不便だ。私もなんとかして世界一難しい言語ともいわれる日本語を早く覚えなくちゃ、と思った。

もちろん、日本語とカンボジア語は全然違う。ひらがな、カタカナ、さらに天ぷらのような漢字も覚えなければならなかった。そんな難しい漢字を、私はいろいろ工夫して覚えやすい方法を考えた。時には工夫しているうちに、とんでもないことになってしまうこともあった。全部書くときりがないので、その中から一つだけ紹介する。

それは私が一番最初に覚えた日本語、“有り難う”という言葉である。お礼を表わす言葉なのに、どうしてこんな小さな“蟻”を使うのだろう。不思議でしょうがなかった。とてもいいことをしてもらったら、むしろ“牛がとう”とか“象がとう”などと言った方が真心を示すことになるのにと考えた。

### 電車の中で

日本で電車に乗ると、私の目につくのは何かを読んでいる日本人の姿だ。私は日本人はよく勉強するなど、はじめのころは感心していた。しかし、私がだんだん日本の文字がわかるようになったころ、いったい電車の中で何を读んでいるのだろうと思ってよく見ると、たいていの人は競馬や野球、プロレスなどの記事が載っているスポーツ新聞、または漫画本を読んでいた。もちろん政治や経済の記事や小説を読んでいる人もいるが、そういう人はちょっと少ないように思った。そして本や新聞を读んでいない人は何をしているのかというと、立っても座っていても、じっと目をつぶっている。寝ている。すばらしいことに、あれだけ眠っているにもかかわらず自分が降りなければならない駅になるとサッと目が醒

め、パッと飛び降りる。とても感心なことだと思った。

### 10年経って

この10年間に私がおかしいなと思ったこと、驚いたこと、がっかりしたこと、そして祖国と違っていたことは数えきれない。今回はその中のいくつかを書かせてもらった。またこの10年に悲しいことも数えられないほどあった。しかし、私は悲しいことより楽しかったことを思い出として残したい。日本人によって悲しい思いもしたけれど、それはその人が日本人だったからではなく、その人が人間として優しさに欠けていたからだと思っている。

あれだけ恐しかった地震も、今では何ともなくなった。火山が爆発しても、今の私だったら逃げるより見学したいくらいだ。きれいな民族衣装一着物—も3年前に迎えた成人式の時、友人から貸してもらって着ることができた。着てみてはじめてわかったことは、こんなに重くて動きにくいものはない、ということだ。そして着物を毎日着て生活をしていたら、とても動きにくく不便だということ納得した。

「きれいな」「かわいいね」とほめられても、その人に対する偏見も消えてしまった。今だったら、ほめられればその気になって「どうもありがとう！」と一日いい気分になる。短かめのスカートもはけるようになった。ただ残念なのは、今でも大ぜいの人とお風呂に入る—裸のおつきあいができないということだ。難しかった日本語も、今では夢の中の会話も日本語を使っている。日本語が難しいというよりも、大学で学んでいる法律の専門用語が難しくて頭になかなか入らない。

そして、今は電車の中で目をつぶっている人たちの気もちがよくわかるようになった。あの人たちは自分のためはもちろん、国のためにも一生懸命会社や工場などで働いたので、帰る時は頭も体もすっかり疲れてしまい、電車に揺られると気持ちよく眠ってしまうのだとわかった。

もしかしたら、電車の中でみなさんの隣に見覚えのある人が眠っているかもしれません。それは、勉強に疲れ、アルバイトに疲れている私かもしれません。朝、家を出て夜遅く帰り、一生懸命日本で生きている私、あるいは私と同じ立場の人が電車の中で眠っているかもしれません。もし見かけたら、この人は日本の社会に慣れたなあ、日本で一生懸命生きているんだなあ、と、やさしく見守って下さい。



# 異文化に学ぶ

## せびることも自立の方法

磯田厚子



ソマリアは掛け値なしに面白い。予想しなかったほどの面白さだ。面白さは主に文字通り「異文化」との格闘にある。出会いなんてもんじゃない。イスラム教で遊牧民。考えただけでも多くのことが日本とは対極にあると想像できるだろう。

「あんたたちはわたしの国ソマリアに援助しにやって来たんだろう？ それじゃ何援助してくれるんだ？ 何もくれないなら帰ったらどうだ…」「JVCは親父でわたらは子供みたいなもんだ。ついては△△がなくて困ってるんだが何とかしてくれないか…」と農民たち。首都モガディシュの交差点で停車していると、乞食が寄ってくるのももちろんだが、普通の身なりのおじさんまで、一度通り過ぎてからふっと私(=外国人+異教徒)に気付き、スッと戻って来てす早く右手をさし出し「バクシーシ(心づけ)」と言う。

「あんたら、もういい大人が何を言ってるの！」と思わず叫んでみたりもした。すっかり援助漬けになって依存心ばかりが育ってしまった……と暗い気持ち

にもなった。援助なんてやめた方がいいんじゃないか。

しかしある日、いつも寄ってくる男の子に、逆に「今日はお金がない。バクシーシ・ケーン(ちょうだい)」と言ったら何と20シル札をくれるではないか。

とあるお茶屋に、老人が杖をついて入ってきて茶を飲んだ。見ず知らずの先客がポケットから百シル札を数枚丸めて、その老人の手に握らせた。老人は乞食でもなんでもない。隣りにいたスタッフにどうしてあげたのかと聞くと、年長者だから敬意といったわりの表現だと言う。

ケニア北部の遊牧民トゥルカナ族では人に物をねだれるのは社会的に一人前の大人であることを意味すると聞く。ソマリアの人に聞いても、物や金を人から貰うことは別に恥でも依存でもない。加えてアラの神の御加護でもある。昔からの生きる知恵だ。

私たちはよく「自立」という言葉を使う。人に頼らないことを意味すると思っている。が、この国での「自立」は人からうまくせびりながら自分が生きてゆくことなのかもしれない。1年半この国で過ごした私は、私達の使う「自立」の概念すら彼らへの押しつけなのかも、と疑問と混乱の中にいる。

## マーシャ村の女性たちに 学んだこと

田尻真由美

JVCエチオピア。マーシャ村周辺の、もうどうにもなりそうにない、見渡す限りのはげ山は、近づいてみると村人ひとりひとりの手で作られたという、石で囲ったテラスに、小さなユーカリの苗がぎっしり植えられていました。母親学級では、明るくてのびのびとしていた村のおっ母ちゃんたちが、皆で黙々と勉強していたり、慣れない手つきで教材用のポスターを描いたり、教室の庭の野菜畑で和気あいあいとキャベツやニンジンの手入れをしていました。エチオピアに来たばかりで何をしたらよいのかわからず、オロオロする私に、「アイゾシ、アイゾシ!!

(頑張れ)」と声をかけてくれる村のおっ母ちゃん。

マーシャ村でJVCがプロジェクトを始めて4年目を迎えた1昨年10月、村は反政府軍の支配地域となってしまう、現在私たちは青ナイルをはさんでマーシャ村の向かい側、ビチェナという地域で活動をしています。

村の女性たちは、6歳ぐらいから重い水がめを背負い、水汲みの仕事を始めます。13歳ぐらいで親の決めた人と結婚して子どもを産みます。蒔払い、畑仕事、川での洗たく、粉ひき、料理と、日本のように電気や水道、電気製品や車のある暮らしとわけが違いますので、彼女たちが担っている仕事は、私たちの想像を越える大変なものです。その間も子どもを産み続け、育てます。妊娠中も激しい仕事を休むことができないので、流産や死産が多く、また男性

優位のエチオピアでは、結婚していても簡単に夫が妻を捨てるので、女が一人で生活に追われつつ、子どもを育てるといったケースが稀ではありません。

厳しい干ばつや内戦、貧困の中で、それでも笑顔を投稿けかけてくる村の女性たち。どうしたら彼女たちの生活が少しでも楽になり、子どもたちの命が少しでも多く救われるんだらうと、男性に怒り、内戦を恨み、雨が降るようにと祈る生活の中で、彼女たちの担うこと、森林、雨、大地、命、内戦、国家間のこと、世界……地球が、私の中で少しずつつながって来たように思います。

はっきりとした意識も、きちんとした知識もないまま、たどり着いてしまったエチオピア。それまでの日本の生活では、いつも心のどこかが不安で空しく、生活を意識するでもなく、テレビや本などの情

報から第三世界に興味を持ちつつも、自分ごときの力でどうにもできそうにないことは、取りあえず関わりたくないというのが正直なところでした。

しかしエチオピアで彼女たちに会って、第三世界という私たちとはかけ離れたものと感じていた所の問題が、実は私自身の問題でもあったことを実感したのです。彼女たちが無意識のままに行ってきたことが子どもたちの死や環境破壊につながるように、私たちの無関心さもまた同じことにつながってゆく。マーシャ村の女性たちは少しずつですが問題意識を持ち、仲間の輪を広げ、勉強し、行動しています。そんな彼女たちの姿に勇気づけながら、ビチエナの女性たちと同じスタートラインに並んだ私自身もまた、これから少しずつ努力を重ね変化してゆきたいと思います。



## フィリピンでの体験が 自分を変えた

竹村 雅義

人には少なからず、自分の生き方を問い、選択をしなければならない時があるように思う。そのきっかけは人それぞれだと思うが、すべてはその人自身の生き方により決定されると思う。

私の場合は、初めてフィリピンに旅行をしたことが一つのきっかけになった。私がそこで見たこと、感じたこと、出会ったこと一つ一つが私の生き方を見直すきっかけとなった。決定的に私と違うと思ったことは、彼らの方が私より人間らしく生きていると思ったことだ。いいことも悪いこともすべて、彼らの方が自分に対して正直に生きていると思った。彼らの家族を愛する気持、“今”を精一杯生きようとする心、私の中になくて彼らの中にあるもの、それがいつも心の片隅でひっかかっていた。自分とは違う生き方をしている人たちがいる、そしてそれを知ってしまったこと、そのことがその後の自分の生き方を決定していったように思う。

☞ 売る楽しみがなくなるから

でも、何かを始めたいと思うまでにはとても時間がかかった。本当はちょっとした一歩なのかもしれないが、その時の私にはとても大きい一歩のように思えた。東南アジアで仕事をしたいと考え始めてから実際にJVCのスタッフとしてタイで仕事をするようになるまで6年かかった。今から思うとどうしてこんなに時間がかかってしまったのだろうと思うが、私にとってそれは必要な時間だったように思う。

今、私が活動をしているパナニコム難民キャンプには2万1000人のインドシナ難民の人たちが第三国定住の日を待ちながら生活をしている。そしてキャンプという閉ざされた環境の中で、精一杯自分の人生を切り開こうとしている。私が難民の人たちに対してできることは限られているが、人間らしく生きたいと願う気持は私も彼らも変わらない。家族を思う気持、よりよい生活をしたいと願う気持には国境がない。私が初めてフィリピンに旅行をした時に感じた時と同じように、彼らも同じ時間を明日に向けて生きている。今を明日につなげることができるか、それは誰にもわからない。でもその答えを持っているのは自分自身に違いない。

# 1991 JVC

いつまでもあると思うな熱帯雨林  
 ろばもりっぱな交通機関  
 はいき(廃棄)物、どこの海にも捨てられず  
 にくまれっこ、昔軍人今商社  
 ほ(掘)ってみて、出ればうれしいアフリカの井戸  
 へん(辺)境も住めばどこもわが祖国  
 とおくても、心は近い第三世界  
 ちょっと待て、まだ使えるよ資源ゴミ  
 りょう(両)の手を合わせてあいさつ仏の国  
 めけそうだ、カンボジア和平への長いトンネル  
 るーく(ルーク)村、力を合わせて手作りかんがい  
 を  
 わらってる、子どもの未来見つめよう  
 かえしてよ、私の国のエビ、バナナ  
 よめさんのふるさと聞けば、タイ、フィリピン  
 たい(タイ)真似て、水浴びしたら風邪ひいた  
 れいぞう(冷蔵)庫、中身の半分外国産  
 そら(空)からは全然見えない国境線  
 つたえよう、森の恵みを子どもたちへ  
 ねぐろす(ネグロス)島、こんなに近い飢える島  
 なやんだら一度は行こう、スタディーツアー  
 らんばつ(乱伐)に赤く染まるサラワクの川  
 むら(村)おこし、女性が主役ラオスの国  
 うしを追う、少年を待つ夕げの煙



## 【解説】

は — 産業廃棄物を積んだ船が、中南米、アフリカと捨て場を探して何カ月も海洋を漂った  
 へ — “辺境”とはそこに住んでいない人の偏見かもしれない  
 め — 国際政治が複雑にからみあったカンボジア問題もようやく和平の兆しが見え、国際社会による本格的な復興協力も間近い  
 る — ルークはJVCが農場建設を行っていたソマリアの地名

れ — 豆腐やみその大豆、山菜、干物まで私たちの食べ物は外国に頼っている  
 つ — 熱帯林に暮らす人々にとって森は生活の糧<sup>かて</sup>  
 な — 悩まなくても行って下さい。外国を見ることはいいことです。もちろん視点をしっかり持って  
 ら — 熱帯では木を伐ると表土に直接日光が当たりカチカチに固くなる。もはや植物は育たず、雨で表土は削られ、川は土の色で赤くなる  
 む — JVCはラオス農村の生活改善のため、女性の

# た か る は い



る

のどじまん，村の祭りの人気者

おーでいーえー (ODA)，まず現地の人と話し合おう  
くめーる (クメール) のほほえみ訪ねてカンボジア

やま (山) 奥の，そのまた奥のモンの村

ま ち ま し ょ う ， ふ た た び 平 和 の も ど る 日 を

け し ま し ょ う ， い ら な い 電 気 ， 冷 暖 房

ふ り 注 ぐ 雨 は PH (ペーハー) 3.5

こ ん に ち は ， 言 っ て み よ う よ 現 地 語 で

え ち お び あ (エチオピア)，緑 に し ょ う 植 林 活 動

て (手) づ く り の 文 化 を 伝 え る 母 か ら 娘

あ め (雨) 降 っ て ， 洪 水 招 く 上 流 の 乱 伐

さ ば く (砂 漠) 化 と 闘 う 村 は 前 線 基 地 だ

き ょ う も ま た ， き の う と 同 じ 難 民 キ ャ ンプ

ゆ ー か り を 植 え て も 戻 ら ぬ 人 々 の 暮 ら し

め こん (メコン) 川 ， 豊 かに 流 る ア ジ ア の 国 々

み え て く る ， 織 物 通 して ラ オ ス の 文 化

し ょ く (食) 糧 を 送 っ て 内 戦 長 び か せ

系

ひ と び と (人 々) の や さ し さ 伝 わ る タ イ の 村

も と (元) 漁 民 ， ホ テ ル の 前 で コ ー ラ 売 る

せ い か つ (生 活) の 苦 し さ に め げ ぬ ベ ト ナ ム の 先 生

す み (炭) 起 こ し ， イ ン ジ ュ ラ 焼 い て エ チ オ ピ ア の 朝  
ん

【イラスト 今村 洋子】

生活改善指導員の養成に協力している

お — 援助国と相手国政府の意向によって決まる  
ODA。住民の考えはなかなか反映されない

や — モンとは東南アジアから中国にかけて住む山  
岳民族。ラオスから難民となってタイに流入  
した人々も多い

ふ — PH3.5はレモン果汁ぐらいの酸っぱさ

き — 難民キャンプでは一応の安全と食糧は確保さ  
れるが，自分からは何も成すことができない。  
ひたすらキャンプから出られる日を待つのみ

ゆ — 原生林を伐採し，商業目的のためにユーカリ  
を植える。虫が来ないので動物はいない。こ  
の森では人々は生活していけない。

し — 援助食糧が時には兵士たちの食糧になってし  
まう，援助の難しさ

も — 海辺がリゾート地になり，漁師は漁に出られ  
なくなった

せ — ベトナムでは先生の給料の遅配は当たり前

す — インジュラとはエチオピア式パンケーキ。テ  
フというけし粒のような穀物をひいて焼く

## 速報 JVCソマリア撤退

ソマリア代表 磯田厚子

1990年12月16日、最後の日本人スタッフの脱出をもって、7年以上にわたったソマリアプロジェクトを閉鎖した。首都モガディシュでの政府・反政府対立が日々悪化し、極限の戦乱状態に陥る難を逃れてのことだ。ここでは撤退決定までの日々と難民の実情等を緊急報告する。ソマリア・プロジェクトの総括は4月号に特集する予定である。

### 1. JVC撤退まで

#### 脱出後2週間で激戦地に

12月30日の朝刊を開き釘づけとなった。首都モガディシュが激戦状態にある。つい1週間前に成田に戻ったばかりの私たちだ。16日に空港で見送ってくれた、他の民間団体の人の顔が目に浮かぶ。ほぼ毎日掲載される記事やケニアの新聞などから、銃撃戦や強盗・集団暴徒化などがありありと想像できる。

反政府軍が首都に迫っていると、私たちが実感し始めたのは、つい11月下旬だ。モガディシュの北方約50キロのジョハールが反政府側に落ちたのが11月20日頃。が、私も含めて人々はその時でさえ、首都には精鋭の政府軍や武器もあるので簡単には入れず、包囲して兵糧攻めにでるのではと話していた。

#### 11月末から急増した首都接近戦

ところが、11月末からはほぼ毎晩のように銃声を聞くようになる。深夜、銃声でしばしば目がさめる。12月1日、宿舎の北東約5.6キロと思える近さでの銃撃戦。3日夜11時頃、突然バズーカ砲のドドンという響きに続き激しい銃声。あまりの激しさに仲間3人で様子を見に恐る恐る屋上へ出る。東方の上空にピンクの銃弾が激しく飛び交う。何十丁もの機関銃の連射だ。宿舎向かいの大統領官邸では数台の四輪駆動車と装甲車の出動の音。深夜3時に雷を伴う大雨となるが、それでも合間から銃声は聞こえ、明け方まで続いた。翌4日、6日にも、方向は少しずつ違うが夜半の銃撃戦がくり返された。

政府はつい10月半ばに複数政党制を認める憲法を発布したのに、12月初めにはゲリラと疑わしきは殺害を許可するとの政令をしいた。首都での銃声の激化はその時期である。これ以前に政府は反政府側と

の和解工作をエジプト、イタリア両政府に依頼し、幾度も反政府側が拒否した後、12月中旬にカイロ会談が予定されていた。ソマリア人は期待していなかったが、外国団体はこの会談に一縷の突破口を期待していた。しかしこの政令でお流れだ。

#### JVC事務所襲われる

12月8日、午後3時、業務終了後日本人3人が事務所まで撤退の準備をしている時、スタッフ送迎車の運転手が両手を挙げてのそっと入って来る。なに冗談やってるの、と言いかけて、おっと本物？ばらばらと3丁のピストルが目の前に！門衛も引っ張られて皆で床に伏せろと言う。約45分家捜し、カバン・机を引っくり返し、退職金準備で机に出ていた大金のシリング・ドル現金、めばしい物をかき集め、四輪駆動車1台を奪って逃げた。

後の情報では、主犯は首都にたむろするルーク出身の大統領部族の若者グループで、実是一緒にきたJVCの運転手が抱き込まれて手引きしたらしい。閉鎖時期はスタッフには知らせなかったが、近いと察し、盗れるうちに盗ろうとしたのだ。幸い誰にも怪我はなかったが、本当にかがかりしてしまった。

船川君には2度目の銃口だ。昨年8月末、現在首都攻撃をしているUSCがジャララクシの現場を襲い、難民支援団体の車・無線・燃料・金・食料を奪った。直後に地元民が発砲しながら火事場泥棒のように押し寄せ、船川君は身の回りの物だけを持って難民キャンプに逃げ、他団体同様、JVCもすべての物、建物すら失った。その後は2人の現場スタッフが公共バスで首都と行き来し、活動を続けてきた。

首都では、ほぼすべての団体が強盗にあった。国連ナンバーの車輛すら強奪された。政府も反政府側も、加えて市民も、自分への物的直接的利益としてしか国際援助をみていない。こんなことはソマリアにかかわった2年3カ月で解っていたのだが、最後の最後にいやというほど見せ付けられた。

### 2. 援助と大統領の画策が激化させた部族対立

反政府運動といっても主義主張の違いではなく、とどのつまりは利権に絡む部族対立である。根深い



## ソマリアの反政府勢力

**北部・イサク族・SNM**（ソマリア国民運動・Somali National Movement）

1988年の北部内戦に始まる。イサク族が、当時違法であったチャート生産で政治・経済両面で力を増したことを警戒した政府が北爆。首都攻撃には加わっていないが、反政府勢力のリーダーとして他のグループと協力関係にある。

**中部・ハウエ族・USC**（統一ソマリア会議・United Somali Congress）

首都攻撃の主戦力だ。部族人口が多く、モガディシュ帯は元来彼らの土地である。昨年3月頃からヒラン郡エチオピア国境のベレットウエイン周辺でゲリラ戦を展開。地元民の絶大な支援を得、着々と首都に接近した。

**南部・オガデン族・SSDF**（ソマリア救国防衛戦線・Somali Salvation Defence Front）

**南部・オガデン族・SPM**（ソマリア愛国運動・Somali Patriotic Movement）

両者はマレハンと近縁部族にもかかわらず、ケニア国境や東南部のエチオピア国境で叛旗を翻した。ルークの丘陵部や国境に数カ月おきに出没し、政府軍基地や車両・食料の輸送を脅かしてきた。



部族主義に攪乱される国づくりしか出来ないのか。反政府活動の活発化と政府による要人暗殺で、人々は極度の相互不信に陥り、首都は部族による住み分けが顕著になった。

ところがシアド・バッレ大統領の就任当時は、むしろソマリ民族としての大統合を目指していた。部族名を言うことさえ禁止されていたという。オガデン戦争でエチオピアにいたソマリ族を支援し、大量難民の流入も国内定住も積極的に支援してきた。

最近の部族対立の極まりには、単に部族主義という文化的な基盤のみでない背景があるように見える。おそらく、難民流入にともない開始された大量の国際援助を、バッレ政権が長年にわたって利権を貪り、出身部族マレハンのみに恩典を与えたことが、部族間に大きな反感と対立を生んだと考えられる。

同時に、現政権が裏で部族対立を画策し、煽り、政権延命をはかったことも、大きな要因である。

オガデン戦争での難民の大量受け入れも、政権強化のために、マレハンとその近縁のオガデンの難民をソマリア国内に引き入れようというもくろみでもあった。その後も、難民のオガデン族の一部は、反政府対策の警備や兵士として働き、いわば政府軍の手先として使われて来た。政府はヒラン郡で活発化したUSCを制圧するために、ジャララクシ難民キャンプの難民を徴用し、一方で、これに反感を持つハウエ族の一部に金や武器を供与し難民を襲わせ、難民がますます政府側につくよう画策したという。

一度は部族対立解消を政策に掲げたバッレ政権がこのような変遷をし、ソマリア全土が部族対立の焦土となった背景として、難民や援助とのつながりを切り離して考えることは出来ない。

### 3. 部族対立に翻弄される難民

北部ハルゲイサ周辺の難民キャンプは、88年の政府によるSNM叩きの北爆で既になにに等しい。中部ヒラン郡はUSCの基地と化し、ジャボレやジャララクシは、11月末の反政府部族の地元民による集中攻撃ではば壊滅。首都へ移動した人も多い。手前の町は反政府側の手にある。再び家を出、何万人もの人々はどこに安心出来る地を見つけるのか。

南部のゲドー郡は大統領部族マレハンの多い地区で、ルーク難民もマレハンが多い。現状は全く情報がなく不明だが、現政権崩壊後の混乱を避け、再びエチオピア側へ去った人も多いだろう。両勢力のリンチ合戦の泥沼になったかも知れない。

唯一比較的平穏だった南部コロレには、多くの家族が12月19日の本国帰還のコンボイを待っていた。国連職員の15日脱出に伴い無期延期となったが、難民に伝えられたのかどうか知らない。

すでに、国際機関・民間団体の支援はすべて凍結し、本国帰還もストップした。

政府側の戦略に取り込まれて来た難民、10数年間も食料やキャンプのサービスを受え続けた難民、キャンプで職もない難民は、どうするのか。国内定住する気はあるのか。本国帰還か。だが、このソマリ族難民の本国は他民族の支配地なのだ。

地元民は難民が来てからおかしくなったと言い、難民は地元民の内戦として距離をおき、ソマリア国民とは感じず、どこかに逃げて再び被災民として援助を求めたいと思っている。難民になることは、出口の見えない迷路に迷い込むことなのか。最大の慰めは、JVC等の支援で農場近くに住んだ農民は被害に遭わず、生活を続けていることだ。

## カブール側からの援助へ

JVC会員 佐藤安信

筆者は昨年9月初旬の10日間、アフガニスタン、カブール市に滞在した。これはその時の記録を要約した報告書であり、今後のJVCの活動の参考にしていただければ幸いである。

### すり鉢の底の町

カブールの町は四方を山に囲まれたすり鉢の底にある。山は岩と砂のはげ山で、緑はまったくない。町も砂漠性の土壌におおわれ、土ぼこりが乾いた空に舞っている。しかし、ところどころに緑も点在する。政府が開発した丘の住宅地には、まばらな林といったものもあり、またブドウ畑もあって、水さえあれば植物も十分生育するものと思われる。

庶民の多くは、このすり鉢の斜面、すなわち市を囲む山ないし丘に泥で作った家をびっしり建て、しがみついている。ここでは地代がいらないからだという。つまりこの斜面の泥の家がカブールのスラムなのだ。

ここで最大の問題は「水」の供給である。子どもや女性が頭上にバケツを乗せ、あるいは肩にかついで水を運んでいる。山の頂上には日本が贈ったというテレビアンテナが、今は軍事用に使われている。カブールは、このように周囲の山によって隔離された社会を構成している。

郊外に出ると東西南北いずれの方向へ向かう国道も戦車のために穴だらけであり、ロケット砲で破壊された建物もめだつ。ただ地雷はカブール周辺にはないが、すり鉢の外はすでに危険であるという。政府が完全に掌握している地域は、この周囲4～5キロほどのすり鉢の中だけというのが現実のようだ。

### ロケット砲に傷つく人々

ムジャヒディン<sup>(注)</sup>の幹部の暗殺という以外、カブール市内ではまず戦闘はない。夜10時以降の外出禁止令を守っていれば、兵士が多いのと、たまに見かける戦車、装甲車を除いては市内は一見平穏である。ここでの恐怖は、いつどこに飛んでくるかわからないロケット砲である。1日100発近く落ちるといわれるが、私の滞在中は、幸い1日に3～4回爆音を

聞く程度であった。“ドーン”だけの場合は政府軍が外に向けて撃ったもの。“ドーン、バリバリ”と続くのが、まさにロケット砲が落ちて、シャープナーという破片が四方に飛び散っている音だ。

シャープナーは100メートル以上も飛び、周囲の人を殺傷する。空港、軍事施設はもちろん、市内の繁華街、道路、住宅地、大学、あるいは結婚披露宴の会場にさえ、いたる所で多数の殺傷者を出している。国連職員もこの例外ではない。特に子どもの被害者が多い。なぜなら外で遊んでいる子どもたちはシャープナーの格好の餌食になるからだ。足を失って松葉づえをつく者、車いすに乗る者が子どもから老人にいたるまで実に多い。地雷、ロケット砲、戦闘による被害である。国際赤十字病院のベッドは満杯で、現在もけが人は増え続けており、新しい病院の建設も考えられている。

半数の女性はチャドルを全身にかぶり、顔の表情はわからない。しかし若い女性を中心に洋服姿もめだつ。特に政府関係者ないしインテリ層は洋装である。男もターバン姿、パンジャブドレスがまだ一般的なだが、軍人、政府関係者は洋装である。

### 経済の混乱 — 女性の物乞いとベンツと

各マーケットに行くと、意外に物資は豊かである。商店には両側の物資もある。郊外のマーケットではコンテナを店にしたものが並び、そのコンテナにはUSAの文字が刻まれている。日本の「〇〇商店」と書かれたままのトラックや、ベンツなどの高級車(外交官ナンバーではない)が走っているのを見た。

マーケットでは野菜、ビニール袋、こま物などを売る子どもが地べたに座り、商店街ではボロを着た子どもばかりか女性までも物乞いをしている。イスラム社会で女性が乞食をするのはよっぽどのことだ。物価は食料品(特に肉)が革命前の500倍にはね上がったおり、コックの給料が10ドル程のこの国で、卵、鶏肉はニューヨーク並みの値段である。革命により多くの財産を没収されたり、処刑されたとはいえ、一方では、まだ月に数千ドルの不動産収入をあげ、海外旅行のできる者もいる。彼らは政府の役人

(注) “イスラム教の聖戦士”の意。反政府勢力。



ではなく、政府関係者はいわゆる団地に住み、いわば中流程度の暮らしのようである。

### 支持を失うムジャヒディン

戦闘はまだ続き、クーデターの試みもあって決して安定はしていないが、徐々に好転してきていると思われる。

一つには、ペレストロイカの影響か、政府も選挙を約束するなど自由化の気運が高まっていること。二つには、ソ連軍の撤退後解放の大義名文を失ったムジャヒディン同士の内部抗争、モラルの低下によって難民および国際社会がムジャヒディンへの支持をなくしてきていることである。このような風向きの変化で、現に国際機関およびNGOはペシャワール（反政府側）を見限り、カブールからアフガニスタン国内への援助に切り換える気運が高まりつつある。フランスはすでに大使館を再開し、アメリカはユニセフを介してカブール側からムジャヒディン支配地域に小麦の配給を始めている。またアメリカは、ムジャヒディンへの武器援助を今年限りとしたと伝えられている。

現在のところ難民の帰還は1カ月5000人程度（これも行きつ戻りつのようである）と推定される。しかし戦闘ないし、ロケット砲撃が下火になり、カブール国内での援助が始まれば、難民の本格的な帰還も始まるものと期待される。

### アフガニスタン援助の問題点と今後の課題

まず援助の政治化を直視しなければならない。これは国際機関、NGOのペシャワールからの難民、人道援助が、現実には難民を通じたムジャヒディン活動への間接援助となり、これがムジャヒディンの難民支配を強め、戦闘の長期化、難民帰還を阻止する原因を作ってしまったという反省である。したがってカブールからの援助が政府の宣伝に利用されないことはもちろん、ムジャヒディン支配地域に援



パキスタンにあるアフガン難民のキャンプ  
(提供UNHCR)

助をする場合も、各派の司令官との摩擦を起こさないため、地域の政治的バランスを十分注意すべきである。「国境なき医師団」はすでにこの点で失敗したといわれる（フランス人医師が2人殺害されている）。

今一つ重大なことは、イスラムの教義である。ムジャヒディンはもともと封建地主であり、イスラム保守派であって、特に女性の教育、とりわけ家族計画などは絶対のタブーとされている。すでにペシャワールにおいて、この種のプロジェクトの有能な推進者が数多く暗殺されていることを知るべきである（時には食前に手を洗うことを教えることさえ命を落とす理由になるという）。

以上から、JVCがアフガン援助を始める場合、カブールからということになるが、まだ時期尚早といわざるを得ない。赤十字連盟が9月からカブールに駐在員を置いたことから、戦闘が下火になりしだいNGOが活動を開始することが予想される。すでにユニセフはじめ国連機関も急速にその準備を進め、すでにプロジェクトを始めている。JVCとしても、十分な情報収集と研究の時期に入っていると思われる。500万人の難民の帰還を考えた場合、我々としても等閑視できないはずであり、十分な準備が必要である。特に日本人は、アジアの雄としてアフガニスタン人から一般に尊敬されており、西欧に比べて文化的にも近く、また歴史的にも中立である。

冷戦構造が解消した世界が次に直面すべき平和の課題は、イスラム世界との相互理解であると思われる。国際協調、平和主義を掲げる日本が貢献すべき舞台であることにまちがいはない。JVCとしては、水、農業、職業訓練等のプロジェクトの応用が考えられる。

最後に、私のこの報告を可能にしてくれたユニセフ、カブールの菅原鈴香さんにこの場を借りて感謝したい。



## メサイアコンサート を終えて

JVCの海外プロジェクトに充当する資金集めを主な目的として一昨年よりスタートした慈善コンサートも、運営の正念場と言われる2年目を乗り切り、3回の公演を併せて3000人以上の方々にご来演下さり、1千万円程の純益を計上することができました。これも様々な形でご協力くださいました皆様のお力添えによるものと心より御礼申し上げます。紙面をお借りして皆様への感謝の気持ちをお伝えするとともに、このプロジェクトの一層の発展を願い、運営上の問題点を、反省を込めて簡単に振り返ってみました。

コンサート運営のイロハも知らず、手探り状態のまま船出をした1年目と異なり、2年目の滑り出しは至極好調でした。運営面でも手慣れて来ていましたし、また音



大ぜいのお客様を迎え、関係者もほっと  
ひといき（十二月二三日）

楽関連の知識も多少の蓄積ができていました。外部の協力者の方々とも相互理解が深まり、世に言う2年目のジンクスなど入り込む余地さえ無いような、正に順風満帆のスタートでした。

しかし1年目より公演回数が増えたことが災いしたのか、肝心の切符の売れ行きが惨憺たる有り様で、予想外の苦戦を強いられる結果となり、本来なら慎重であるべき2年目に手を広げた代償を払うべく、ポケットに切符を入れ、文字通り東奔西走の毎日となりました。市場調査とセールス

・プロモーションの不備に加えてPR活動も後手に回り、コンサート直前まで観客動員数の予測も出来ない有り様でした。

音楽を媒体として、心ある方々の善意や誠意を具体的な形として第三世界の困窮する人々に届ける橋渡しをするには、それらを最大限に活かす努力が不可欠です。それには効率的で、より系統的な運営が必要です。今回の経験を教訓として、皆様のご厚意を無にしないような不確定要素の少ない音楽会作りを目指す所存です。真価が問われるのはこれからです。（巢山）

## DISCO FOR SARAWAKU

1990年の最後を飾るにぎやかなイベント、ディスコフォーサラワクが12月28日、横浜氷川丸で開催された。

マレーシアのサラワク州におけるすさまじい熱帯雨林の伐採によって住みかを奪われた、サラワク先住民の生活と森を守るため、JVCは7月に発足されたサラワクキャンペーン委員会の呼掛け人に

名を連ねていたが、具体的なキャンペーン活動としてはこれが初めてだった。

当日の参加者は150人を超え、ホールは熱気でムンムン、まさに熱帯を思わせる盛り上がりであった。マスコミが積極的に取り上げてくれたこともあり、今まで関心のなかった人々も多数参加してくれた。別室にサラワクの現状を知らせるパネルを展示したりビデオを流したり、またホールでは、ブナン族愛用の籐籠などが当たるビ



ンゴゲームを行ったりと、ディスコで盛り上がりながらいつの間にかサラワクに触れるというにくい企画だった。（清水）



## この人に聞く

### 年次報告書を英訳

#### D.マッキンタイアさん



年一回、会員総会のあと、JVCは年次報告書を作ります。数十ページとはいえ、専門用語がならびちょっと難解です。昨年夏にできたその報告書を一人で英訳してくださった方がいます。ドナルド・マッキンタイアさんです。カナダ生まれで、イタリアで放送記者を経験したあと来日。現在は日本経済新聞社で英語版の編集をなさっています。忙しいジャーナリストの生活のかたわら、JVCのために働いてくださるその理由を聞いてみました。(A.G.)

#### 何もしないほうがおかしい

「現在、世界では、毎日4万人もの子どもたちが、飢餓で死んでいるといわれています。このような状況のなかでJVCのような、団体の一員として働かないのは、むしろ、おかしいことだと思います。

先進国の人々の暮らしは、日ごとに厳しいものになっています。地価の高騰で家も買えないとか、仕事の忙しさから人間らしい生活もできないとか、公害とか……、数えあげればきりがありません。しかし、先進国のそれは途上国で暮らす人々の抱えている問題に比べれば、楽なものかも知れません。

4万人もの子どもたちが毎日死んでいくという現実には、今や、驚くべきことではなくなってきています。もしアメリカ人が、あるいは日本人が毎日4万人も死んでいくようなことがあれば、世界は絶対に彼らを救おうと動きだすに違いありません。それなのにいろんな国で、人がばらばら死んでいくという現実には、目を向けないでいいのだろうか？

私自身、他の多くの人と同じように、この厳しい現実を見守っていくことしかできない人間かも知れません。実は、ずいぶん前から、JVCのようなグループに入りたいと思いつけていました。そして日本に来て開始したのです。JVCで翻訳の仕事ができて大変よかったと思います。そしてさらにこれからもやっていきたいと思っています」

#### 周囲のボランティア活動を見て育てば……

「ここまで経済大国となったにもかかわらず、JVCのようなグループが数えるほどしかないという現実には、大変残念なことだと思います。西洋と日本との宗教の違いも影響しているかもしれませんが。仏教についてはあまりよく分かりませんが、キリスト教についていえば、困っている人に手を差し伸べるというのは基本的な教えです。ですからボランティア活動というものは、昔からその地域地域に根ざしていたものなのです。

日本は戦後敗戦のショックからなんとか立ち上がり、現在のような、他の国では見られない経済成長をなしとげました。しかし、ひょっとしたら、自分の国のことばかり考えすぎて、まわりが見えなくなってしまったのかもしれない。

これからの日本はもっともっと他の国に目を向けて、この国のできる役割を認識すべきです。日本のODA援助は世界で一番ですが、GNPから考えるとまだまだ少ないものです。ODAの援助資金が増えることも大事ですが、もっと大事なことは、そのお金が途上国の人たちにとって、効果的になるように使われなければいけません。そうするには日本の国民一人一人が、その政府のやり方をしっかりと見つめて、もし間違っていると判断するならば、声を大にして訴えなければなりません。それにはJVCのようなグループが大切だと思います」

インタビューの席にマッキンタイアさんは、ローマ字をタイプした原稿を持ってこられました(上の文章はほんの少しテニオハを治した程度です)。あらかじめ、電話で簡単に趣旨を説明しておいたのですが、こんなことは初めてです。その文章を読んだあと、少しお話をしました。そのとき一番聞きたかったのはやはり日本人と欧米諸国の人との差です。

「私たちは小さなときから、海外援助だけでなく、いろんなボランティア活動を見て育ちます。そこが日本人と違うのかも知れませんが」

子どもたちと一緒に活動をすれば自然にボランティア活動をする大人になってくれるのかも知れませんが。マッキンタイアさんは来日して2年、それ以前はほとんど勉強してないのに、日本語がとても上手です。といってもなにも不自由なく、というほどではありません。最初はかなり苦労もあったといいます。

「でも、勉強になりますから、日本人の友人に相談しながらやりました」

この積極さも見習いたいものです。





1990年12月、進行中の造植林プロジェクトの調整のため、タイ国チャイャプーン県に行ってきた。プロジェクトに関しては改めて書く機会があるので、ここでは私が泊めていただいた家の人たちの声を紹介したい。

ソンおじいさん（65歳，ワンヤイ村）

生まれも育ちもナコンサワンさ。第二次世界大戦のときは日本兵が村にやってきてねえ、そのうちの2人に頼まれて1年も一緒に森の中に入っていて、タイ語を教えたり、竹の子の採り方とか動物の獲り方とかなんでも教えたよ。一人はオトセという名だったなあ。生きていれば80歳以上だね。

あのころは森に何でもあった。動物だっておもしろいほど獲れた。だけど森がなくなって、生活が難しくなって、しかたがないから親戚も一緒に10年前にここに移住して来た。左隣の家はわしの妹の家、右隣の家はわしの弟とばあさんの妹が夫婦になって住んでいる。子供たちもたいていはこの近くに住んでいるよ。ここも森があってきれいな水が湧いていたけど、生きるためにトウモロコシを植えなくなっちゃなくて今では丸裸さ。

— ソン氏の年頃の人たちは昔の話をする時夢を見るような目をする。きっと森や鹿やキノコなどが見えているに違いない。

ウィチット（36歳，ソンの次男）

トウモロコシ作ってるけど、7年前から綿も作っている。でも楽だったのは1、2年だけ。5年前くらいから虫や病気が発生して、種を蒔いてから1カ月目には農薬をやらなくなっちゃなくなった。ところが今年はどうだい！種蒔きしてから7日目にもう農薬だよ。収穫までにとうとう合計10回の農薬散布さ。しかも値段が昔の農薬の倍もする強い農薬じゃなくちゃだめなんだ。もうこんな農薬はやれないよ。

JVCが来てくれて本当にありがたい。植物性の薬はどうかって？いいねえ、安全だしよくきくよ。

— ちょっとだけ綿摘みを手伝った。綿摘みはティアムおばあさん（ソンの妻）の仕事である。インニム家の綿はよくできていて私の背より高い。もっとも昔の綿はこんなに背が高くなかったそうだ。約半分の綿には真っ赤なきれいな虫が巣を作っている。5、6匹もいる虫を追い出さなくてはならないのと、農薬がいっぱいかかっていることとがいやで、とうとう綿摘みは1度だけしか手伝わなかった。

手入れが悪いのか土地が悪いのか、木も貧弱、実もほとんどついていなくて収穫されずに放置されている綿畑が村のあちこちで目についた。

ケソン（37歳，ナートゥンヤイ村）

プラチンブリで生まれたんだけどチャイャプーンの町に近いところに移って、それからここに来たの。うちは家のまわりにいろいろ木を植えていてきれいだった？おじいさんが伝統医療師だったの。これはニンニクの木っていうの。葉も花も食べられて薬になるのよ。ニンニクの匂いがするでしょう。ここいらではこの木があるのはうちだけよ。どうして他の家では植えないかって？みんな知らないのよ。木を植えておけば日陰にはなるし、実はなるし、いいことばかり。木を植えない人ってまだどこかへ移住しようと思っているんじゃないの。タイ人は移動するのが好きだからね。

— ケソンの家の畑も庭も豊かだ。そして、とにかくよく働く。広い畑での仕事の段取りも鮮やかだ。野菜の移植でも、ただ抜くだけではなく、土をダンゴにしてくるんでいるのは彼女だけだ。彼女のように様々な工夫をこらす人は、他の人たちのお手本として貴重な存在となる。

（岩崎美佐子）

# JVCプロジェクト

1990年12月25日現在

| 活動地名                             | 活動内容                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              | 支援団体                                                                                                                                                                         | 担当者                                                                                                                           |
|----------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <b>東京本部</b>                      | 渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報等。<br>機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。<br>JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～8時<br>毎月第2, 4土曜日 午後2時～4時                                                                                                                                                                                                                                            | 全国社会福祉協議会                                                                                                                                                                    | 岩崎駿介(代表)<br>林 達雄(事務局長)<br>熊岡路矢, 星野昌子,<br>前川昌代, 山口誠史,<br>鈴木由子, 今泉 恵,<br>富安光子, 富安庸太郎,<br>柴田久寿子, 高梨直樹<br>岩間邦夫                    |
| <b>神奈川県</b><br>(JVC神奈川)          | 神奈川県内での渉外, 事業計画, 資金調達等を行う。<br>12月28日, 山下公園にある氷川丸で, サラワク州の熱帯林伐採の反対キャンペーンのための資金援助に, 「ディスコ フォー サラワク」のパーティを開催。                                                                                                                                                                                                                                                        |                                                                                                                                                                              | 清水俊弘                                                                                                                          |
| <b>日本国内</b>                      | ●定住民プロジェクト<br>11月28日, 「東南アジア青年の船」で来日中の若者約25名に対して, 国内定住難民及びタイ国境難民についてのオリエンテーションを行った。<br>12月9日, 横浜市金沢区で第3回「インドシナ料理の会」(ラオス編)が行われ, 25人が参加した。ラオス人講師2人を迎えて, ガイヤーン(焼鳥), ソムタム(青パパイヤのサラダ)を作り, もち米といっしょに試食した。                                                                                                                                                               | ジャパン・タイムス<br>神奈川県福祉部<br>禅林寺龍華会基金, ケアハウス<br>さくら苑, 明るい社会づくり運動<br>神奈川県協議会                                                                                                       | 小野豪大, 他約60人                                                                                                                   |
| <b>環境</b><br>タイ<br>(チャイャプーン県)    | ●植林<br>12カ所で40世帯の農家が, 農薬・化学肥料を使わない野菜作りを始めた。<br>●国際会議の開催<br>準備を進めている。<br>●調査・研究<br>タイのNGOにそれぞれの団体の特徴を生かした調査を依頼した。                                                                                                                                                                                                                                                  | 国際開発高等教育機構(FASID)<br>庭野平和財団,<br>イオングループ<br>1%クラブ                                                                                                                             | 岩崎美佐子, Komain<br>Soongsumalaya,<br>Kasemsan Sriwatana,<br>Chukiat Katchamat-<br>tya, Prasit Ingo,<br>Mr. Chalaem<br>Kaewchoho |
| <b>エチオピア</b><br>(東ゴジャム州)<br>ビチュナ | ●ビチュナ緊急救援活動<br>東ゴジャム州青ナイル川沿いの低地斜面は慢性的な干ばつ被災地でありながら, あまり知られておらず, 外部からの支援を受けることがなかった。JVCはカナダ政府, WFPから食糧を入手し, フード・フォー・ワーク(労働などの代価を食糧で渡す)形式で食糧配給, 栄養失調児に対する保健栄養指導を行っている。内戦により多少遅れながらも以下の日程で進んでいる。<br>第1回食糧配給: 90年5月 対象者: 3万人<br>第2回食糧配給: 90年8月 : 7万人<br>第3回食糧配給: 91年1月 : 3万人<br>同時に村の復興の準備として, 道直し, 泉の保護, 植林などの作業を始めている。<br>●農村の総合的復興促進<br>91年5月の段階で, 復興計画再開の地域を決定する。 | CRDA, WFP,<br>犬養道子・みどり一本運動, モ<br>ラロジーMIRC,<br>東京グリーン・<br>ウォーク, 西本<br>願寺, Tree for<br>lifeの会, 中部<br>善意銀行, 毎日<br>新聞社会文化事<br>業団, JVCカレ<br>ンダー, メサイ<br>アコンサート,<br>エチオピア救援<br>バザー | 山田 盛, 江原浩昭,<br>江原広美, 田尻真由美,<br>寿賀一仁, Solomon,<br>Shikur, Ali,<br>Tekleyohannes,<br>Yodit                                      |

| 活動地名                                                                                  | 活動内容                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             | 支援団体                                                                                                                                                             | 担当者                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
|---------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <b>ソマリア</b><br>マガネイ・キャンプ<br>(ゲトー郡)<br>ハルバ・キャンプ<br>(ゲトー部)<br>ジャララクシ・<br>キャンプ<br>(ヒラン郡) | <p>治安の急激なる悪化により、1990年12月16日をもって、すべての日本人スタッフは出国した。再入国のめども立たないため、同時にすべてのスタッフ、ワーカーを解雇し、事実上ソマリア・プロジェクトを閉鎖した。現行の難民支援プロジェクトは、以前より、90年末を持って閉鎖することを予定し、その準備はすすめていたので、日本人の撤退は予定よりも数カ月早まったものの、プロジェクト進行にはそれほど打撃はなかったと考えている。閉鎖の詳細及びソマリアの現状については、本号記事を参照のこと。</p> <p>●農業による自立促進<br/>           ハルバ地区の新設農場6つに、バナナ・パパイヤ・レモンなどの果樹やインドセンダン等の苗木を配布した。治安悪化のために10月初旬以来農場へ行けなかったところである。<br/>           ジャララクシは、キャンプへの反政府軍や地元民による11月末以来の襲撃のために、多くの難民がキャンプから脱出し、混乱をきわめている。しかし、キャンプから少し離れているところの農場の農民たちは、農場近くに居を移し、被害に遭わずにすんだようである。</p> <p>●家畜プログラム<br/>           11月初旬、ヤギ、ヒツジへの投薬トレーニングを第1グループ(10家族)に行った。また、第2グループ(12家族)への家畜の配布を11月16、17日に行った。<br/>           上記襲撃による混乱のため、11月下旬以降、プロジェクト継続は不可能と判断し、すべてのスタッフを引き上げた。</p> | UNHCR,<br>メサイアコンサート<br>R.I. Japan                                                                                                                                | 磯田厚子, 船川秀夫,<br>船川三貴子, Siyad<br>Mohamed Mursal,<br>Muhubo Mohamed<br>Aden, Rashid Mohamed<br>Rangale, Mohamed<br>Alasow Owke,<br>Hire Abdi Digale,<br>Shupri Mohamed<br>Hussein, Mohamed<br>Mohamud Ahmed                                                                                             |
| <b>カンボジア</b><br>カンボット県<br>プノンベン市<br>カンダール県                                            | <p>●サンタビエップ技術学校/ワークショップ<br/>           車両による国内輸送が復興のために果たす役割を重視し、①ワークショップ(修理工場)の設立 ②自動車の部品等の供給 ③自動車整備士の養成を初期の目標として、1986年にこの事業を開始した。JVCは現地実施機関の運輸省自動車輸送公社と人材面、技術・理論面で協力し、第一期、第二期と訓練を行ってきた。<br/>           輸送公社には現在100台余りの日本製トラックがあり、JVCが部品を供給し、現地の自動車整備士が修理、メンテナンスに当たっている。</p> <p>●RINE(ライン)プログラム(母子保健活動)<br/>           母親教育、危険な妊娠の発見と早期移送、分娩等に携わる助産婦の訓練や医療器具・医薬品の供給などを行う“母性保健”と、小児発育検診や検診で表出された栄養失調児のケアを行う“小児保健”活動を行っている。</p> <p>●井戸掘り・給水<br/>           1990年から農業省水利局とOXFAM・LWS・JVCとの共同事業になったこの活動は、年内に90本の井戸を掘る計画でスタートした。しかし、内戦や、ソ連・東欧の援助撤退の影響で、現在活動は停滞している。<br/>           通常の計画に沿った井戸と、国内の避難民キャンプに掘った井戸を合わせ、現在36本が掘られた。</p>                                                                  | 創価学会青年平和会議、モラロジーMIRC、立正佼成会、日産労連、西本願寺、善興寺ダナ基金、高岡寺族青年会、毎日新聞大阪社会事業団、明るい社会づくり運動神奈川県協議会、浄土宗東京教区青年会、国際保健協力市民の会(SHARE)、四日市商業高校、JVCカレンダー全日本仏教青年会、カリタス・ジャパン、真如苑、メサイアコンサート | 古西 勇, 馬 清,<br>杉江美子, 本橋 栄<br>「現地の実施・調整機関と主な担当者」<br>(運輸省)<br>国際局<br>Meas Semeth<br>自動車輸送公社<br>Thach Cang<br>(保健省 母子保健局)<br>Ann Sarun 医師<br>保健委員会<br>Nhim Nhem 医師<br>プノンベン郡<br>保健事務所<br>Sam Sarung 医師<br>母子保健活動<br>Tui Kath<br>Mat Samon<br>(農業省 水利局)<br>The Iv Khim<br>井戸掘り活動<br>Hok Setha<br>So Sarin |

| 活動地名                                                  | 活動内容                                                                                                                                                                                                                                                                                                           | 支援団体                                                                                                                                        | 担当者                                                                                                                                                      |
|-------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <b>タイ</b><br>バンコク事務所                                  | ①総務、会計、資金調達<br>②各機関（国連、タイ政府、日本大使館、各国民間援助団体）及び東京事務所、ラオス・カンボジア・ベトナムを含む、各プロジェクトとの連絡調整<br>③情報収集、広報活動 ④在タイ日本人との連絡調整<br>・タイ内務省とビルマ難民に関する話し合いを持つ。<br>・1990年度のCCSDPTの執行委員の任期を終える。<br>●奨学金プロジェクト<br>12月10日から16日まで、タイ南部のナコンシタマラート、クラブ、サトゥーン県の奨学生を訪ねる。全体的に経済状況が良くなってきたので、期限つきで打ち切る予定。<br>●クロントイ図書館<br>主婦ボランティアがクリスマス会をした。 | 全国社会福祉協議会<br>メサイアコンサート<br>Tree for lifeの会、雄勝町町内寺院会、国際ソロプチミスト駿河、からし種モラロジー<br>MIRC                                                            | Pornpimol Chaiboon,<br>Kamol Mingmuang,<br>Manas Torkan<br><br>Suntaree Lawsuan,<br>池島千津子、主婦ボランティア15名<br><br>Samruay Jongyorklang                        |
| カオイダン<br>（カンボジア<br>難民キャンプ）                            | ●西崎憲司記念技術学校<br>12月18日、3学期が終了し、124人が卒業した。今年度は、バンタットからの生徒を待たため始業が遅れ、受益者は684人だった。                                                                                                                                                                                                                                 | UNHCR,<br>SV (Stichting Vluchteling)                                                                                                        | Somyot Rattana-tham,<br>Sutthi Netprakhon,<br>井本勝幸、井本美奈、                                                                                                 |
| パナニコム<br>（第三国定住待ち<br>キャンプ）                            | ●日本語学校<br>12月17日よりラオス難民が日本語学習を始めた。日本行きは155人で、そのうち日本語学校の生徒は9クラス102人。子どもが54人いるので、子どもクラスを考えている。<br>12月27日、年末パーティを企画、生徒たちの自主的な運営により、クックロー大会、ラオスダンスが行われた。                                                                                                                                                           | IOM                                                                                                                                         | 竹村雅義、熊沢ゆり、<br>岡村達司、蘭牟田浩美、<br>Chowarite Duang-prom                                                                                                        |
| ブリラム県                                                 | ●農村開発<br>農民の意識調査を行った。パイ村長のグループにならない、とうがらし等の栽培を始める。                                                                                                                                                                                                                                                             | モラロジーMIRC,<br>JOFIC, JVC<br>カレンダー                                                                                                           | Komain Soongsu-malaya, Thongkham Sumruengram,<br>Chowarite Duang-prom                                                                                    |
| <b>ラオス</b><br>ヱエンチャン<br>県<br>ボーリー・カム<br>サイ県<br>カンムアン県 | ●生活改善普及員養成プロジェクト<br>保健衛生、農業、教育など生活全般の改善に携わる女性の生活改善普及員を養成すると同時に、普及員の地域開発活動を支援している。<br>現在各県で普及員による村人を対象にしたトレーニングがJVCの建設した3カ所の母子センターを中心に行われている。カンムアン県ではタイのNGOのATAの協力のもと、普及員と村人を対象に井戸掘りトレーニングを1週間にわたって実施した。<br>また、11月16日から29日まで普及員の東北タイ・スタディツアーを行い、12月17日から21日までヱエンチャンで、各地の普及員の活動評価を兼ねた再トレーニングを行った。                | UNDP,<br>UNIFEM,<br>庭野平和財団,<br>NVC, 日産労連,<br>ギャラリーイカ<br>ット、聖ヨゼフ<br>老人ホーム、老<br>人ホーム天寿荘<br>難民と地球の緑<br>を考える会、グ<br>ループ・カンガ<br>ルー、メサイア<br>コンサート、 | 谷山博史、北詰秋乃、<br>原田恵津子、<br>Thanongsi Solankum,<br>Maliphet Sukkhasume<br>（ラオス女性同盟）<br>Khamone Phetdao-heuan,<br>Khamphone Saignavong<br><br>JOCV, JVC カレンダー |
| <b>ベトナム</b><br>ホーチミン市<br>ハイフォン市                       | ●地域総合復興（南部）<br>11月、12月は第8区の病院および識字学級、職業訓練所への設備支援を行った。ヒーボンスクールにミニバスが到着し、ビンチャン郡では病院の歯科機能を充実し、フォンフー小学校は全5教室の改築が終わる。<br>●帰還難民のための職業訓練（北部）<br>11月16日より中野周二、稲見圭がハイフォン市に常駐し、活動を開始した。電気のコース（34名）、洋裁のコース（30名）はすでに始まった。自動車修理と木工については、場所が確定し、現在ワークショップを建設している。                                                            | UNHCR,<br>庭野平和財団                                                                                                                            | 熊岡路矢、中野周二、<br>稲見 圭<br>Le Thanh Hai<br>Nguyen Trang Thu<br><br>（現地の受け入れ機関）<br>UNHCR ハノイ<br>ハイフォン市<br>Nguyen Luong Trao                                    |

## JVCの活動とその目的に御理解を

▶ **JVCとは**—Japan International Volunteer Center  
は1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体  
です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動  
を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形が  
できました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日  
本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等  
によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、  
宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境  
にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶ **JVCの会員募集について**—会員は、総会に出席し、  
JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の  
活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。  
会員の種別と年会費は以下の通りです。また会費には  
機関誌の購読料が含まれています。

・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円  
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)

▶ **機関誌『Trial & Error』のみの購読について**

・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円

・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶ **送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

①会員：東京5-48365 加入者名—JVC会員係

②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC東京事務所  
(住所、氏名、購読開始月をお書き添下さい)

▶ **みなさまの募金を支えるJVCの活動**—救援活動をより充  
実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の  
20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

A. **アフリカ難民募金** (12月小計 874,500円)

アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われま  
す。

B. **グリーン・フォー・アフリカ募金** (12月小計 407,500円)

アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。

C. **カンボジア募金** (12月小計 299,099円)

カンボジア国内の復興のために使われます。

D. **タイ募金(奨学金・スラム・農村)** (12月小計 692,739円)

タイの人々の生活向上のために使われます。

E. **ラオス募金** (12月小計 541,104円)

ラオスの生活改善、プログラムに使われます。

F. **ベトナム募金** (12月小計 91,848円)

ベトナム帰還者及び国内復興のプログラムに使われます。

G. **定住難民募金** (12月小計 62,500円)

定住難民のための日本語教材費と家庭訪問員の交通費に使  
われます。

H. **環境募金** (12月小計 100,000円)

環境を守るためのプログラムに使われます。

I. **JVC運営経費募金** (12月小計 306,000円)

現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われ  
ます。

J. **無指定募金** (12月小計 1,978,512円)

▶ **送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

東京9-27495 (募金種目名をご記入下さい)

加入者名—JVC東京事務所

## 編集後記

▶ 湾岸戦争、パレスチナ問題、バルト三国の緊張の高まり  
など、世界は急激に動いている。いま、市民は急をつかれて  
何もできない。しかし、市民がこれまでの努力で築きあ  
げた国際的市民ネットワークを使って、フルに動かねばなら  
ない。戦争に反対し、日本の参戦を防がねばならない。  
大国は少なくとももっと冷静でなければならない。第三世界  
の一角がちょっと理不尽だからといって、肩を怒らし、重  
爆撃を加える正当性などなにもない。ましてや、戦争を理  
由に、アメリカへの拠金とODAをふんだんに使い、また  
しても資本の中枢を儲けさせる理由など、なにもない。  
私たちも、しっかりと考えつつ、的確に行動しよう。(岩崎)

## 犬養道子・「みどり一本」募金

東京0-212497 (12月小計 279名 2,571,550円)

犬養道子さんの御厚意により、JVCに上記の口座を設け  
ました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使  
われます。

Trial & Error は再生紙を使用しています



1990年1月20日発行 (毎月20日発行)

編集人 岩崎駿介、前川昌代

発行人 林 達雄

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC) 東京事務所

〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階

☎03(834)2388 FAX: 03(835)0519

Telex: 7604025 JVCHQ UC

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易セン  
タービル9F (助)神奈川国際交流協会内  
☎045(671)7082

印刷所 ㈱ベスト・プリンティング

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。